

第89回 「コース」「時代」と アイドルの蜜月時代

1971年(昭和46年)4月、小柳ルミ子が『わたしの城下町』でデビュー、6月に『17才』で南沙織が続き、10月に『水色の恋』で天地真理が『時間ですよ』経由でデビューを飾り、デビューの遅かった天地を除き小柳と南が紅白歌合戦に出場、翌72年の紅白には3人揃っての出場が実現します。

デビュー時期とブレイク時期に多少の差がある新御三家(野口五郎、郷ひろみ、西城秀樹)が揃って紅白に出場するのが74年、そして前年デビューした桜田淳子と山口百恵は、同じ74年の大晦日、紅白の先輩、森昌子とともに揃って出場します。高1トリオの揃い踏みでした。

元祖「御三家」のうち、舟木・西郷が落選、時の流れを感じさせる紅白でもありました。

昌子・淳子・百恵の同学年トリオ揃っての出場は、その後、百恵が引退する前年の79年末の紅白まで6年続くこととなります。

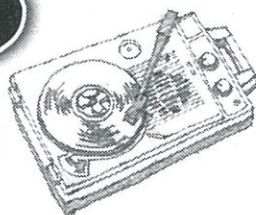
淳子・百恵の絶頂期にあたる75年

から77年まで、ふたりはそれぞれ別の学年雑誌のイメージキャラクターに抜擢され、鎬をけずることになり

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎 浦松本 絵



ます。彼女たちが高校2年となった75年春、学研発行の『中学一年コース』を年間予約すると「年間予約プレゼント」として淳子が表紙となっているオリジナル手帳と特製万年筆をゲットできました。一方、ライバル誌だった旺文社発行の『中一時代』には百恵が登場、まさに「スタ誕」出身者同士による販売合戦が3年ほど続きました。

私が愛読していた1960年代中期の『中学〇年コース』は芸能記事も少なく、せいぜい舟木一夫やデビッド・ジャンセン、ジャニーズなどのスター物語が掲載される程度で、ほかの楽しみといえば、吉永小百合や三田明などのカラー写真がピンナップとしても飾れる綴じ込みカルネ



ダー付録くらいのものでした。

表紙にしても、旅客機だったり同世代の男女モデルだったりしたのですが、70年代に入り淳子・百恵の時代になると、表紙は『明星』『平凡』と見紛うばかりのアイドルたちの笑顔で占められるようになります。芸能誌を買いたくても買えない中高生にとって、両誌は「学習雑誌を買うんだから」といって堂々と親にせがむことのできるありがたい存在であったことでしょう。

淳子ちゃんや百恵ちゃんが表紙で微笑む雑誌を机の傍らに置いてどの程度勉強がはかどったかはわかりませんが、アイドルの存在を身近に据えるこうした体験は、やがて自分史の中の映像として同級生と同じような感覚でその笑顔を甦らせてくれます。

「淳子とコース」の蜜月関係が最後の年となった77年に私は学研に入社しましたが、歌謡界にはピンク・レディー旋風が吹き荒れ、翌年の年間プレゼントはピンク・レディーのサイン入り万年筆に代わります。

昭和のアイドル百花繚乱の70年代は、アイドルと活字の世界が相乗効果と学習効果を発揮した時代でもありました。